

水の文化 雨の

ゆくえ



- 沖 大幹「雨に思えば」
- 倉嶋 厚「忘れられない雨のはなし」
- 村瀬 誠・人見達雄・佐藤 清「個人下水道という発想の現在」
- 山田吉彦「海に生きる観天望気」
- 石田潤一郎「雨をしのぐ屋根、外に誇る屋根」
- 登 芳久「雨を通す道路舗装」
- 芳賀 徹「表現される雨」
- 水の文化楽習実践取材「言葉は文化 新聞で伝える沖縄文化」
- 編集部「雨はどこへいくのか」
- 古賀邦雄 水の文化書誌「俳句・短歌」

水の文化 August 2004 No. **17**

水の文化
2004
17



ミツカン水の文化センター

表紙上：30年前には、雨が降り始めるとどこからともなくカエルやカタツムリが現れ、水たまりにはアメンボが泳ぎ始めた。
飽きずに眺めた子供時代は郷愁の彼方に行ってしまったが、思い浮かべるだけで豊かになれるのは、記憶の宝物だろう。

表紙下：自然の色は一雨ごとに鮮やかになり、少しずつ夏化粧を身にまとう。

裏表紙上：雨に濡れることへの感覚は、国によって大きく違う。
アジアの中でも、とりわけ私たち日本人が雨に濡れることを厭うのは、一体どこに源があるのだろうか。

裏表紙下左：窓についた雨粒に目を凝らしてみると、その一つひとつに逆転した風景が映り込んでいる。
見る視点を変えてみたら、と雨が言っているのかもしれない。

裏表紙下中：傘を広げると一人ひとりの幅が増し、すれ違うのに作法を必要とされる。
雨降りには、車中で濡れた傘を人に触れさせない配慮など、忘れがちな他者との間合いを再確認するチャンスを与えてくれるようだ。

裏表紙下右：ドライバーにとっての雨は、タイヤをスリップさせたり視界を遮ったりと、ネガティブな要素でいっぱいだった。
しかし、ワイパーやタイヤ、ガラスコーティングの進化に加え舗装面の改良などが、雨と日常との隔たりを埋めようとしている。

